

柔術黒帯の人妻インストラクターを、

閉店後の道場で無理やり犯したった

「どうなさったの、野田さん？」

営業終了後の柔術道場内には、もう誰もいないはずである。にも関わらず、道着姿の会員——野田信治が、突然事務所に現れたので、柏木優里は驚いた。

「ごめんね、ちよつと腹を壊したみたいで、トイレに籠ってたんだよ……」

野田はおずおずと、申し訳なさそうに説明した。

どうやらトイレに籠っているうちに、道場の営業時間が過ぎてしまったらしい。

「ああ、そうでしたの。それは気づかなくてごめんなさい。今、玄関の鍵を開けますね」

会員が全員帰ったかどうか、トイレの中まではチェックしていなかった。

（確認ミスね……次からは気をつけないと……）

優里は、自らを戒める。

彼女は、まだ柔術着を着たまま、一日の締め事務作業をしていた。その作業を一旦中断し、鍵を持ち、椅子から立ち上がる。

スタッフ用の裏口玄関は、会員は使用禁止にしていた。だから会員を帰すためには、正面玄関のドアを解錠しなければいけない。

「お手数かけちゃって、ごめんね」

野田は、ペコリと頭を下げた。

「いいですよ。こっちの確認ミスですから」

事務所を出ていく優里に、野田は、後ろからぴったりとへばりつくように歩いていた。その距離は、不自然に近かった。野田は後ろからこつそりと、優里の首すじのあたりの匂いを嗅いでいた。

二人は、五十畳の薄暗い稽古場を通り、正面玄関に向かった。

そのタイミングで、野田は、ぼそりと優里の耳元に声をかけた。

「あの、先生……」

「ん、なあに？」

優里は立ち止まり、くるりと後ろを振り向く。

「きゃっ」

すると、すぐ目の前に野田の顔面があつたので、小さく悲鳴をあげた。

「ちよつと教えて欲しいことがあるんだけど、これから少しだけ稽古をお願いできないかな？」

野田の声は、かすかに震えていた。

優里とキスでもするかのように、その顔を近づけてくる。

「え、これから？ 明日ではダメですか？」

優里は慌てて、野田と距離を取りながら、怪訝そうに尋ねた。

今はもう営業時間が終わり、午後十時を過ぎている。道場内にはもう、優里と野田の二人だけしかない。

「うん、ちよつと……。どうしても今すぐに確認したいことがあってね……」

野田はそう言つて、ずいとは一歩、距離を詰めた。

「うーん、そうですね……。でも原則、そういうことは営業時間内に言っていただけかないと……」

優里はそう言つて、一歩下がった。そして不審そうに、妙に鼻息の荒い野田を見つめた。

「……じゃあ特別に、パーソナルトレーニングという形で対応させて頂こうかし

ら。追加料金かかっちゃいますけど、どうします？」

優里はことさらに明るい口調で、そう言った。明るく振る舞って、野田が作り出したこの不穏な空気を、なんとか吹き飛ばそうとした。

「うん、お金は払うよ……。じゃあ悪いけど、よろしくね……」

野田の声は、不気味に低い。

「わかりました……。じゃあ、電気をつけるわね」

稽古場に、煌々と明かりが灯った。

優里はそのときに、野田の鋭い目つきに気づいて、ギョツとした。

「それで……。何を教えれば良いですか？」

優里は内心、不審な野田に怯えていた。しかし平静を装い、そう尋ねた。

「柔術の強さを見せてほしい……」

野田の鼻息は、ますます荒くなってきた。

「どういう意味ですか？」

優里の警戒心も、ますます強くなっていく。

「これから俺、先生を手籠めにするから……」

野田はそろりと、そう吐き出した。

「は？」

優里の顔が、ぴりりと引き攣った。

「ちよつと野田さん、怖い冗談はやめてください。脅かさないでよ……」

優里は、恐怖に顔を歪ませていた。

「冗談じゃない、本気だよ。じゃあ、問答無用でいかせてもらうから……」

野田信治はいきなり、柏木優里に襲いかかった。

「ひっ」

優里は小さく悲鳴をあげた。

深夜の格闘が始まった。

野田信治は、六十五歳の独身男である。世間一般の感覚でいうと、*“老人”*と呼ばれる年齢になっていた。

しかし野田は、自分はまだ若いと思っていた。

何もかもが現役バリバリである。毎朝、しつかり朝勃ちもしていた。

野田は好色な男である。そしてそれが自分の若さの秘訣であると思っていた。

男たるもの、女への興味を失ってしまったらおしまいだ。それが野田の持論である。

若い頃からずっと風俗通いが趣味だった。しかし仕事も定年退職して、年金暮らしとなり、現在はあまり金を使えない状況になっていた。だから、これまでのように頻繁には風俗に行くことができない。

その代わりに通い出したのが、柔術道場である。ネットで調べた、指導員が全員女性で、さらに女性会員も多いという評判の、*“カリニョ柔術道場”*に通いはじめた。

道場の月謝は二万円——決して安くはなかったが、風俗通いに比べると大した額ではない。

柔術は、寝技の格闘技である。そして稽古では、女性と寝技のスパーリングができる。

そのスパーリングが、野田にとつては風俗みたいなものであつた。柔らかな女体と組んず解れつして寝技の攻防を繰り返す。それはとても気持ちよくて、興奮した。

野田は毎日、道場に通つた。

そしてだんだんとスパーリングだけでは満足できなくなつてきた。それで、一番のお気に入り指導員である柏木優里をレイプする計画を立てた。

優里は、カリニーヨ柔術道場のオーナーの妻——三十四歳の魅力あふれる女性である。

その優里が、道場で一人だけになるタイミングを狙つた。

営業時間が終わった後、最後まで残るのは優里であることを知っていた。だからトイレに隠れ、営業終了後に優里を襲うことを計画した。

不同意性交等罪で刑務所に入ること覚悟の上である。

どうせ老いさき短い、気軽な独り身である。やりたいと思ったことは我慢せず、なんでもやる。

野田信治はどうしても柏木優里の肉体が欲しかった。

（もう、困った会員さんね……）

容姿端麗な柏木優里は、よく男性会員からのセクハラ行為を受けていた。

しかし実際に襲われてしまったのは、今回がはじめてである。

優里は暴漢——野田信治を恐れたが、それでも彼女の動きが硬くなることはない。

彼女は柔術黒帯——護身のプロである。暴漢に襲われた時に自分の身を守るように、ずっと訓練してきた。

（いやだわ、こんなの……）

深夜の稽古場、柏木優里は内心で大きなため息をつきながら、野田と組み合っていた。

野田の鼻息は火のように荒い。彼は力づくで優里を組み伏せようとしていた。それを優里は、軽くいなす。

野田の身長は百七十七センチで、体重は九十五キロである。身長百六十五センチ

の優里よりも、体はかなり大きい。

（野田さんの力は強い。でも動きは遅く、反射神経は鈍い……）

優里は、野田と組み合いながら、そう感じていた。

野田の目つきは獰猛にギラついていた。優里はその目を見ると、恐怖を覚えた。

試し読みはここまでです！

ここから二人の淫らな戦いは、みるみる熱を帯びていきます。

老人の手による、人妻柔術家の凌辱劇。

続きはぜひ本編でお楽しみください！